

為替週間展望 = ドル円はもみ合いながら方向性を探る展開か

[7月10日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		7月3日～7月7日			
	始値	高値	安値	終値	前週比
ドル・円	144.40	144.91(3)	143.46(7)	143.50	-0.81
ユーロ・ドル	1.0915	1.0934(3)	1.0834(6)	1.0893	-0.0016

国内株・金利/米国株・金利		終値		前週末比	
		終値	前週末比	終値	前週末比
日経平均株価	32,388.42	-800.62	日本10年債利回り	0.442	+0.041
ダウ平均株価	33,922.26	-485.34	米10年債利回り	4.029	+0.175

<来週の主要経済統計等>

- 10日 日本5月経常収支
中国6月消費者物価指数、中国6月生産者物価指数
日銀支店長会議、地域経済報告(さくらレポート)公表
- 11日 英6月雇用統計
独6月消費者物価指数
独7月ZEW景況感指数
北大西洋条約機構(NATO)首脳会議(12日まで)
- 12日 日本5月機械受注
NZ準備銀行(RBNZ)政策金利
米6月消費者物価指数
カナダ銀行(BOC)政策金利
ブレイナード米国家経済会議(NEC)委員長講演
- 13日 中国6月貿易収支
英5月鉱工業生産指数、英5月製造業生産指数、英5月貿易収支
ユーロ圏5月鉱工業生産指数
米6月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数
- 14日 日本5月鉱工業生産指数
スイス6月生産者輸入価格
ユーロ圏5月貿易収支
カナダ5月製造業出荷
米6月輸入価格指数
米7月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値
主要20カ国・地域(G20)財務相・中央銀行総裁会議(18日まで)

【前回のレビュー】7月第1週は米雇用統計など、注目度の高い経済指標の発表が相次ぐ。堅調な米経済指標が続くと、ドルのサポート要因となり、ドル円は底堅い推移を見せることとなる。ドル円の一段の上昇局面では、日本の金融当局によるドル売り円買い介入が警戒される中、ドル円は緩やかに上値を追う展開になるとした。

【ドル円は伸び悩み】

ドル円は高値圏でもみ合いながら、やや上値重く推移している。ドルが伸び悩みとともに、円売りの動きも一服している。ドル円は上昇が息切れして、クロス円も全般に上げ一服となっている。ドルインデックスは6月22日の安値101.48近辺から6月30日には103.23近辺まで上昇した。その後はおおむね102～103台でのみみ合いとなっている。

米国などの主要国の中銀と日銀の金融政策の方向感の違いから、ドル円やクロス円は

堅調な推移を見せてきたものの、その流れも一服している。ドル円、ユーロ円、豪ドル円は上げが一服、ポンド円は高値圏でのみ合いとなっている。ポンドは英中銀（BOE）による利上げ継続が当面続くとの見方がポンド高を支えている。

また、ドル円は6月30日に145.07まで上昇したものの、145円近辺では日本の金融当局による介入警戒感もあり、上値を伸ばしにくくなっている。

6月30日に発表された米5月個人消費支出（PCE）デフレーターは市場予想を下回った。また、7月3日発表の米6月ISM製造業景況指数も予想を下回った。いずれもドル売りにつながる要因となった。5日発表の米連邦公開市場委員会（FOMC）議事要旨では、利上げ継続姿勢が示された。それほど目立った反応はなかったが、米国株には重石となった。

6日の東京市場では日経平均が一時700円超の下げとなったことを受けて、リスク回避の円買いの動きが活発となり、ドル円は一時143円台半ばまで下落した。ただ、6日のNY市場では米6月ADP雇用統計+49.7万人となり、予想の+24.1万人を大きく上回った。さらに米6月ISM非製造業景況指数が予想を上回ったことでドル買いに傾き、143円台後半から144円台後半まで上昇した。

CME FEDウォッチでは、7月のFOMCでの政策金利の据え置き確率が8%前後、0.25%の利上げ確率は92%前後となっている。経済データ次第ながらも、市場では7月のFOMCでの利上げを予想する可能性が高まっている。FOMC議事要旨のタカ派的な内容や米ADP雇用統計の好調な結果を受けて、7月は追加利上げに動くとする向きが多い。

米6月ISM製造業景況指数、米6月ADP雇用統計、米6月ISM非製造業景況指数、米雇用動態調査（JOLTS）など経済指標は強弱まちまちの動きとなっている。こうした結果、ドル円は144円を挟んでの振幅を見せている。押したところでは底固いものの、145円超では上値の重い展開を見せている。

12日の米6月消費者物価指数の伸びが鈍化するようだと、ドルの上値を押さえそう。一方で、10日の週はFRB当局者による講演が数多く予定されており、タカ派的な発言が多く出てくる可能性があり、ドルの下支え要因となりそう。こうした中、経済指標や株価や要因発言に一喜一憂しながら、ドル円はもみ合いながら方向性を探る展開となりそう。ドル円の目先の予想レンジは、143.00～146.50円。

今後の日米の経済指標やイベントとしては、10日に日本5月経常収支、12日に日本5月機械受注、米6月消費者物価指数、13日に米6月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数、14日に日本5月鉱工業生産指数、米6月輸入価格指数、米7月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値などがある。

【ポンドドルは堅調もユーロドルは伸び悩み】

30日の6月の米PCEデフレーター、3日の米ISM製造業景況指数の下振れなどを受けて、ドル売りユーロ買いの動きから、ユーロドルは一時1.09台に乗せたものの、その流れが続かず上値重く推移している。

欧州中央銀行（ECB）が利上げを継続するとみられるものの、ユーロ圏の経済指標の鈍化や下振れがユーロの上値を抑えている。5日発表の6月ユーロ圏サービス業PMI、ユーロ圏6月生産者物価指数などは低調な結果となり、ユーロ売りにつながった。引き続きもみ合いながらも上値の重い展開となりそう。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0700～1.0950ドル。

一方で英国では消費者物価指数が高止まりしている。6月21日発表の5月の英消費者物価指数は前年比+8.7%となり、予想を上回り、前回と同水準となった。コア前年比は+7.1%となり、予想の+6.7%や前回の+6.8%を上回った。コアは鈍化するどころか伸びが加速しており、英中銀（BOE）は年内に複数回の利上げを実施すると見込まれている。こうした中、他の通貨と比べてポンドは堅調でポンドドルは上昇基調で推移している。目先はこの傾向が継続して、さらに上値を迫る展開となりそう。ポンドドルの目先の予想レンジは、1.2650～1.2900ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、10日に中国6月消費者物価指数、中国6月生産者物価指数、11日に英6月雇用統計、独6月消費者物価指数、独7月ZEW景況感指数、12日にNZ準備銀行（RBNZ）政策金利、カナダ銀行（BOC）政策金利、13日に中国6月貿易収支、英5月鉱工業生産指数、英5月製造業生産指数、英5月貿易収支、ユーロ圏5月鉱工業生産指数、14日にスイス6月生産者輸入価格、ユーロ圏5月貿易収支、カナダ5月製造業出荷などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。